http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.139　13/01/17

夢の話

　いよいよ３年生はセンター試験である。会場が日比谷だから、多少心に余裕を持つことができるかも知れないが、何にせよ、自分の一生と大きく関わる試験である。先輩方が、そして、日比谷を会場として使う受験生の方々が気持ちよく実力を発揮できるよう、しっかりと教室の環境を整えてほしい。

＊

　しかし、３年生はそれなりに精神的に追い詰められていることだろう。それは、頑張っているからこそのことであるのだが、ここでちょっと話を替えて、君たちは夢は見る方だろうか？　私は結構見る方だと思う。いろいろ見るが、仕事などに追いつめられている感じで見る夢は、けっこうパターンが決まっている。

①何かから逃れようとするのだが、足の筋肉が固まってしまったようになって、足を早く動かすことができない。（階段を早く上れないといった場面が多い気が…）

②電話をかけようと思うのだが、思うようにかけることができない。

③英語の答案を書いているのだが、スペルを間違えたり、字が大き過ぎたりしてうまく解答欄に書くことができず、消しゴムで消して何度も書き直すうちに、答案用紙が破けそうになる。

…といったのが代表的。こうして書いていても苦しくなってくる（笑）。

　結構傑作なのは②で、夢の中に出てくる電話は、決まって（プッシュ式ではなく）ダイヤル式である。私が高校生くらいの時までは、電話はまだダイヤル式だったのだ。

　で、夢の中では、ダイヤルの穴にうまく指を入れることが出来なかったり、間違った番号の穴に指を入れてしまったり、まわしている途中で指が抜けてしまってダイヤルが元に戻ってしまったり…と、プッシュ式では考えられないような苦労（笑）をしているのである。ちなみにこの話、君たちのオトーサン、オカーサンにしてみると、かなりウケル可能性があるのではないかと思う。

＊

　この「夢」に新しい意義を見いだした人物がジークムント・フロイトである。人間には「無意識」の領域があり、そこに意識することが苦痛であるような体験・記憶、欲望などを抑圧して貯め込んでいるのだが、それが意識の検閲が弱まる睡眠の間に「夢」となって現れると考えたのである。『精神分析入門』や『夢判断』といった著作に概要が述べられているが、この無意識の発見は、以後の科学や芸術に大きな影響を与えたのである。